

小規模校所在自治体からの意見聴取の概要

1 概 要

- 対 象 2学級以下（予定を含む）の小規模校（自治体に唯一設置されている高校）が所在する8自治体
（最上町、金山町、真室川町、小国町、白鷹町、遊佐町、河北町、大江町）
- 聴取期間 令和元年10月8日（火）～10月21日（月）
- 聴取方法 高校改革推進室職員が、対象となる自治体を訪問し意見を伺う。

2 聴取事項

- 高校は地域にとってどのような存在か、地域の活性化に求められるものは何か
- 地域にとって必要な高校はどのような高校か
- 小規模校の再編整備はどうあるべきか
- その他

3 意見の概要

（1）高校の存在意義

【中学生の学びの選択肢の確保】

- 金山校を今後も存続して欲しい。新庄市内の高校に行けない生徒の受け皿となる県立高校は必要である。（金山町）
- 3分校全て無くなれば、特別な支援が必要な生徒を受け入れる高校が無くなる。（金山町）
- 最上校は、小規模校ならではの人材育成や地域貢献活動などの特色ある取り組みを行っており、存続のための配慮をお願いしたい。町も遠距離からの入学生に対応した「セミナーハウス最上寮」を整備するなど、今後も頑張るつもりだ。（最上町）
- 真室川校は、小規模校の特徴を生かし、最上地区で大きな役割を果たしている。（真室川町）
- 小国高校へ進学を望む生徒・保護者にとって、小国高校の存在は大きい。（小国町）

【まちづくり】

- 最上校が無くなることは地域の衰退に繋がる。最上町になくてはならない高校であるという地域の思いは強い。（最上町）
- 少年議会において、遊佐高生は主体となり活動しており、町に対して様々な提言をしている。高校生の発想は、今の時代にマッチしており、まちづくりに大きく貢献している。（遊佐町）
- 町内に高校があれば、生徒だけでなく町民にとっても安心であり活気がでる。（金山町）
- オープンキャンパスでのバス運行、最上校文化祭への町民の参加など、最上校の存続に向け町をあげて支援している。（最上町）
- 左沢高校は、大江町だけでなく、西川町、朝日町にとっても非常に大きな存在である。（大江町）

【地域活性化】

- 真室川校は、日頃から地域住民とともに地域行事に取り組んでおり、その姿は町の活力の源であり、地域の活力に繋がっている。町民は存続を望んでおり、町は、引き続き、支援を行っていく。（真室川町）
- 最上校の存続に向け、既存の「新庄北高最上校同窓会」、「新庄北高最上校振興会」に加え、今年度設立された「新庄北高最上校存続を望む会」からも協力を得ている。（最上町）
- 町民も小国高校の重要性を認識しており、小国高校を支援する会も積極的な支援をしている。（小国町）
- 荒砥高校の卒業生は、町の地域づくりだけでなく様々な場面で活躍している。（白鷹町）
- 山形鉄道の維持には、荒砥高校の存続が不可欠である。（白鷹町）
- 遊佐高校の生徒は、町の行事やボランティア活動に積極的に活動しており、町との繋がりが強く、町の活力の元となっている。（遊佐町）

- 生徒が一人になっても左沢高校を存続して欲しい。左沢高校がなくなり、町に高校生がいなくなってしまうことは非常に寂しいことだ。(大江町)

【地元定住】

- 遊佐町内への定住促進には、町内に高校があることは大変重要なことである。(遊佐町)
- 谷地高校で学ぶことは、河北町に対する愛着と誇りを醸成するだけでなく、将来河北町への回帰に繋がる。小学校、中学校、高校教育を通じて、誇りと愛着をもつ人材を育てたい。(河北町)

【地元企業への就職】

- 町内企業に就職する生徒がいなければ企業は町から撤退し、町から企業がなくなれば町がなくなる。小国高校は、地元企業を支え、地域の活性化にとって欠かせない存在である。(小国町)
- 荒砥高校に対して、町内企業の期待は高く、地元高校生の採用のため尽力している。今年度は、7名の荒砥高校生が町内企業への就職が内定した。(白鷹町)
- 企業に対して、小国高生採用に加え、女性の採用人数の増加を要望しており、女性の採用が6名まで増加した。(小国町)

(2) 高校に対する期待

- 町にとって荒砥高校は必要である。生徒が魅力をもてる学校、教育内容となるよう可能な範囲で支援したい。(白鷹町)
- 平成30年度の学級減で2学級になったが、2学級では活動するのに活力がなくなり、3学級になることを目指したい。他地区からも生徒が集まってくる魅力的な高校となるよう、町としても一緒に考えたい。(河北町)
- 中学生が選択してくれるような魅力的で特色のある高校であって欲しい。(大江町)
- 左沢高校には英語に特化したコースを作り国際社会に役立つ人材育成ができる等、各校に特色を持たせることが必要だ。(大江町)
- 「左沢高校に入ると真の大人になれる」教育ができるような学校づくりをして欲しい。(大江町)

(3) 再編整備の基準・在り方

- 現在の募集停止のルールの入学者20人を、教員や教育委員会が15人であっても教育が成り立つという認識があれば、人数の緩和も可能ではないか。(金山町)
- 最上地区の高校再編において、真室川校については、入学者数の減少で募集を停止することではなく、新しい高校教育の体制をスタートすることとを協調し、6教振期間内の令和6年度までは存続し、その後の7教振の中で取り扱いを検討して欲しい。(真室川町)
- 当面は、現在の再編整備ルールで頑張るが、6教振期間(平成27年～令和6年)の後は見直して欲しい。(金山町)
- 最上地区内の小規模校に、交通事情等の地域の実情への配慮がなされるのであれば、町としても強く要求していく。(真室川町)
- 再編整備のルール抵触後、即座に学級減や募集停止を決定せず、地域の実情に十分に配慮しながら、地元自治体と十分な話し合いが必要ではないか。(小国町)
- 募集停止基準を、現行の2年連続から3年連続に変更すれば、きりがなくなる。(金山町)
- 県外からの入学者増加のため、現行の定員10%枠の緩和をお願いしたい。県外から受検を考えている生徒は、この枠のため本当に合格できるのか不安を抱いている。加えて、推薦入試で県外生徒の志願が可能と制度変更できないか検討して欲しい。一般入試では、合格発表日から入学式まで期間が短く、県外からの入学生にとって余裕がなく慌ただしい。(遊佐町)
- 将来の中学校卒業生数をベースとして再編整備を実施しているが、高校改革は、減らすだけの改革であってはならない。大きな志の改革をしなければ、県自体が衰退しかねない。(大江町)
- 県として将来のグランドデザインをどのように描くのか示してほしい。(大江町)